

茅ふきたより

会からの報告

平成23年度文化庁ふるさと文化財の森普及啓発事業報告

五箇山の茅場と茅葺き文化の
維持保全をはかるための普及啓発事業

▼秋の相倉集落



▼斜面にある菅沼集落の茅場



も く じ

- | | | | |
|-------------|---------------------------------|------------------------|---------------------------------|
| 04 | 03 | 02 | 01 |
| カリヤスの植株 | 茅葺き体験研修および若手職人技能研修 | カリヤスの茅刈り体験研修 | 会からの報告 |
| 04 | 05 | 06 | 05 |
| カリヤスの草木染め体験 | 「五箇山の茅葺き」茅刈りから茅葺きと合掌造りの暮らし」パネル展 | 絵本「五箇山の茅葺き屋根のつくりかた」紙芝居 | 「五箇山の茅葺き」茅刈りから茅葺きと合掌造りの暮らし」パネル展 |
| 12 | 10 | 06 | 05 |
| イベントのお知らせ | 茅葺き文化講座 茅葺き職人談義 | 茅葺き文化講座 | 茅葺き文化講座 |

平成23年度文化庁ふるさと文化財の森システム推進事業普及啓発事業として、「五箇山の茅場と茅葺き文化の維持保全活用をはかるための普及啓発事業」を行いました。南砺市教育委員会をはじめ、相倉区、菅沼区、富山県西部森林組合五箇山支所、財団法人世界遺産相倉合掌造り集落保存財団、越中五箇山菅沼集落保存顕彰会の皆さんの協力を得て、茅葺き民家と茅葺き文化の存続をはかるため、茅葺きの素材と技術に対する理解を深め、茅場と茅葺き文化の価値を普及啓発し、支援と共同の輪を広げるために実施したものです。

昨年度から2年間にわたって、五箇山を対象に事業を行うことで、地元では、合掌の森構想という気運が高まり、茅葺き学校をつくるという目標も生まれました。

茅葺き技能研修には、茅葺き職人以外に、庭園協会から造園職人が多数参加しました。日本庭園を作庭する中で、茶室や門などを茅葺きでつくるといった目的があるので、茅葺きのあらたな担い手として期待されます。

カリヤスの茅刈り体験研修

10月29日 菅沼集落・10月30日 相倉集落

五箇山では、集落に近いところから田畑として利用し、茅場は未利用地の山の急斜面にあります。相倉集落の茅場は日向なので、茅を刈り取ってそのまま茅場で干してから結わえて運搬し、昔はそのまま秋に屋根葺きをしていました。一方、菅沼集落の茅場は日陰なので、茅を刈り取ったらすぐに結わえて、集落に運搬して、まず雪囲いにして乾燥し、雪溶けの春に屋根葺きをするという違いがありました。

茅刈りワークショップでは、菅沼の茅場で刈って、運搬して、雪囲いを体験し、相倉の茅場では刈って、干すという体験をしました。また、菅沼集落では過疎化と高齢化により、茅刈りを森林組合に任せていたので、茅を刈ったことのない住民がほとんどでした。そのような状況の中、昨年度の茅刈りと茅葺き体験ワークショップと市民講座を通じて、気運が高まり、今年度は、菅沼集落の住民が参加者と一緒に茅刈りを行うことができました。



▲相倉集落の茅場

カリヤスの茅刈り体験研修

日時 平成 23 年 10 月 29 日 (土)～30 日 (日)
場所 富山県五箇山 菅沼集落茅場、相倉集落茅場
参加者 21 名
講師 茅葺き職人 小林亀清氏
世界遺産 相倉合掌造り集落保存財団 辻清市郎氏

10月29日(土)
14時30分～17時 茅刈り体験研修(菅沼集落)
19時～20時30分 茅葺き文化講座
20時30分～ 交流会

10月30日(日)
9時～12時 茅刈り体験研修(相倉集落)



▲刈った茅を雪囲いにする(菅沼)



▲菅沼集落の斜面にある茅場で茅刈り体験



▲茅刈り体験ワークショップの参加者



▲雨の中、相倉集落で茅刈り体験

茅葺き体験研修および 若手職人技能研修

11月21日 菅沼集落

茅葺きワークショップでは、各地の若

手職人が参加する技能研修と一般市民の体験研修のコースに分かれ、五箇山の茅葺きの技を学びました。研修では、マンサクの若木を使うネソ練り、ネソ結びを行い、さらに縄結びを二種類学んだ後、平葺きの茅並べからヌイボクで茅をとめ、カケヤで叩き縄を絞めていく体験研修を、幼児から大人まで一緒になって行いました。職人対象の技能研修では、それに加えて破風とオジリの葺き方の技能研修を行いました。

同時に開催した茅葺き文化講座「職人談義」では、同じ合掌造りでも白川郷と五箇山では、葺き方が異なることや、地域色豊かな茅葺きの技を職人から学びました。



▲森林組合の若手職人による指導



▲若手茅葺き職人と一般参加者に分かれて指導を受ける

茅葺き体験研修および若手職人技能研修

日時 平成23年11月20日(土)～21日(日)

場所 富山県五箇山 合掌の里(菅沼)

参加者 50名(職人12名、一般38名)

講師 富山県西部森林組合五箇山支所

11月20日(土)

14時30分～17時30分 カリヤスの植株と草木染め体験

19時～20時30分 茅葺き文化講座

20時30分～ 交流会

11月21日(日)

9時30分～12時 茅葺き体験研修／技能研修

13時～15時 茅葺き体験研修／技能研修



▲ネソ練り



▲ネソで縛る



▲平を葺く



▲破風を葺く

カリヤスの植株

11月20日 菅沼集落



▲参加者約 50 名

菅沼集落で、新しい茅場の造成のため、桑畑だった千平方メートルを活用して、茅の植株を行いました。あいにくの雨模様でしたが、地元の茅葺き職人の小林亀清さんにご指導頂き、カリヤスの株を植えました。約50人の参加者とともに、合計で二百株のカリヤスを植えることができました。



▲鍬で堀り、株を植えていく



▲植え方の説明を受ける

カリヤスの草木染め体験

11月20日 菅沼集落



▲白いハンカチーフを染める

古くより染料として使われていたカリヤスで、草木染め体験を行いました。地元で活動する高畠先生にご指導頂き、合掌の里内の茅葺き民家にて、行ないました。淡い黄色いハンカチーフが染め上がりました。



▲刻んだカリヤスを煮出して染める



▲カリヤスを細かく刻む

「五箇山の茅葺き 茅刈りから 茅葺きと合掌造りの暮らし」 パネル展

これまで制作してきた、五箇山のかつての茅場の風景、維持管理、茅刈り、屋根葺きの技のパネルを使用して、相倉集落の高桑家にて10月29日から11月19日、菅沼集落の「与八」にて11月20日に、パネル展を開催しました。あわせて全国の茅葺き集落の写真パネルも展示し、材料や葺き方、屋根のかたちの違いを比較できるパネル展になりました。



▲菅沼集落での展示の様子

絵本

「五箇山の茅葺き屋根のつくりかた」

紙芝居

日時 平成 24 年 2 月 21 日 (火)
場所 南砺市立城端小学校、
菅沼集落「吾郎平」
参加者 城端小学校 85 名 (小学 3 年生)



◀絵本表紙

世界遺産として世界的に注目を集める合掌造りですが、地域内では高齢化がすすみ、合掌造りを守る所有者や技術者の後継者の不足が心配されています。そこで、未来の地域の担い手である子ども達に合掌造りに親しみを持たせるとともに、茅葺き文化を伝えることを目的として昨年度制作しました、世界遺産五箇山の合掌造りのつくりかたと暮らしのかたについて解説した絵本を、南砺市内の小学校に配布するとともに、朗読会を開催しました。昨年度は五箇山の平小学校、上平小学校で開催し、流域連携をはかる第一歩として、今年度は城端小学校

で開催しました。さらに、菅沼集落に茅場の多面的価値と利用についての勉強会に集まった菅沼集落、相倉集落住民のほか、県および市職員を対象に朗読会を開催しました。小学校での質疑応答では、茅葺きにはどんな生き物が住んでいるのか、なぜ合掌造りは3階や4階まであるのか、など子供たちから活発に質問が出ました。絵本については、さらに子供向けに分かりやすくすることが課題となりました。



▲菅沼集落の勉強会にて大人にも朗読会を行なった



▲紙芝居形式で朗読会を行なった (城端小学校 3 年生)



▲城端小学校の朗読会の質疑応答の様子

茅葺き文化講座

10月29日 相倉集落



▲高桑家で行なった茅葺き文化講座

茅葺き文化講座 1

日時 平成 23 年 10 月 29 日 (土)

場所 富山県五箇山 相倉合掌造り交流館「高桑家」

参加者 35 名

〈開催プログラム〉

司会 坂本善昭 (日本茅葺き文化協会理事)

■あいさつ

代表理事 安藤邦廣 (筑波大学教授)

南砺市教育委員会文化課長 浦辻一成

■講演「茅原の生き物の生態と保全」

島佐代子 (大阪自然環境保全協会専門研究員)

■報告 1「茅場の再生と活用—森林塾青水の活動報告—」

清水英毅 (森林塾青水 塾長)

■報告 2「五箇山の茅場の歴史」

浦辻一成 (南砺市教育委員会文化課長)

■交流会



▲島佐代子氏

茅は、植物 100% なのでそこが見分け

何かに尻尾を絡み付けるために、他のネズミとは異なり尻尾が長い。後ろ足は、人間の手のように、開くことができ、開いて物をつかめるようになっていて。ハツカネズミや他のネズミはこのような足はしていない。これはカヤネズミ最大の特徴。後ろ足の指が 5 本、前が 4 本。耳は拡大すると小さい毛がたくさん生えている。これは草で耳を切ってしまうように保護されている。

カヤネズミの巣について紹介する。鳥は巣材をもってきて架けるが、カヤネズミは葉っぱを編んで作る。カヤネズミの巣は、植物 100% なのでそこが見分け

10月の茅刈りワークショップでは、29日に相倉集落で「茅葺き文化講座」を参加者、地元住民を対象に開催し、35人が参加しました。三人の講師から、草地の多様な生き物の生態や、茅場の再生と利活用の取り組み、五箇山の茅場の歴史について学びました。

茅原のなかに住む小さなカヤネズミの研究をしており、カヤネズミを中心に茅原の保全について話す。京都の淀川水系の支流の木津川の河川敷が主な調査地で、このような湿った環境には、オギやヨシといったイネ科の植物が群落をつくっていて、河川敷にみられる典型的な茅原である。

ヨシ、オギ、ススキ、カリヤスなど大型のイネ科の植物を総称して茅と呼び、茅が沢山生えている環境を茅原といい、人間が茅を刈って利用するために管理している場所のことは茅場という。人にと

って資源を得る貴重な環境で、生き物にとっても自分が餌を食べたり、子育てをしたり寝たり重要な環境である。日本は雨が多く温暖な地域なので、常に攪乱が必要。洪水など自然の攪乱、草刈や火入れなど人為的な攪乱をしないと、草地は森になってしまう。

カヤネズミは、コウモリと同じで夜行性。草の中にいるので、草で切ってしまう。草の中にあるので、草で切ってしまう。背中はおレンジで顎からお腹にかけては真っ白で、これは保護色である。学名はミクロミスミノテスといって小さい小さいネズミという意味。世界でも最小クラスで、体のサイズは約2センチメートルで人間の親指くらい。重さは五百玉1枚分、一円玉7枚分。住処は草の上である。全国的に数が減っていて、富山県は数が

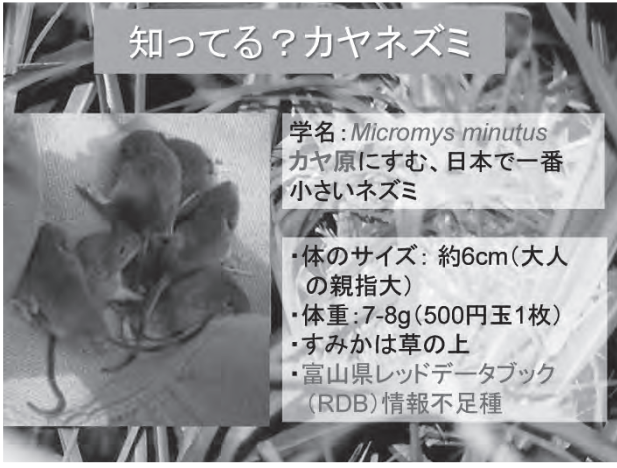
少なすぎて、絶滅の判定ができないくらい情報が少ない。

カヤネズミの1年は、春から秋にかけての繁殖期と冬の非繁殖期にわかれる。繁殖期は5月から11月で、ススキやオギ等が伸びる時期と一致している。青々としたススキ、オギが伸びだして1メートルくらいになると巣作りが始まり、2メートルに伸びるまでの間に作られる。その巣は子育てや自分のねぐらにも使う。鳥のように巣で卵を産むのではなく、親の寝場所には別にあり、夜になると子供におっぱいをやりに行く。そういう暮らしをしている。秋になって穂がでて枯れると上の巣は寒いので捨て、地面の下にもぐって越冬する。ただ冬眠はしない。

るポイントである。中を開くと、外枠は粗く、内側はふわふわで、二重構造になっている。寒くなるとススキやオギを入れて三重構造になる。この中に赤ちゃんがはいっているものすごく温い。

茅原はどんどん減っている。原因は都市開発や農業の近代化にある。これまで茅葺きや焚きつけの材料であったり、飼料であったり田畑の肥料であったりと人間にとって貴重であった。しかし経済的な価値が失われ、管理されることもなくなってきた。また宅地へと転用されることもある。草地は一九七五年には62万ヘクタールあったが、30年後の二〇〇五年には36万ヘクタールへと減った。この30年間で森林の面積はほぼ変わらないが、

知ってる？カヤネズミ



学名: *Micromys minutus*
カヤ原にすむ、日本で一番小さいネズミ

・体のサイズ: 約6cm(大人の親指大)
・体重: 7-8g(500円玉1枚)
・すみかは草の上
・富山県レッドデータブック(RDB)情報不足種

▲カヤネズミ

草地は大きく減少している。これによってカヤネズミのように草でしか巣をつけないような、あるいは他の生き物であっても、草の中でしか生きられない動物が絶滅の危機に直面している。レッドデータブックという絶滅に瀕している動植物の本があるが、そのうちの半分くらいが草地のもの。カヤネズミについては23都府県のレッドデータに記載されていて、生息地の保全が見直されている。草地には低い背丈の低茎草地とオギやススキといった背の高い高茎草地の2種類がある。一口に草地といっても、多様であり、丈の高い・低い場、それぞれを必要とする動物、両方で暮らす動物、それらを狩る動物などがある。草地を刈り維持していくことは必要なことであり、さらにカヤネズミの生活に影響の少ない刈りかたを目指している。国土交通省の協力を得て、本来一度に全部刈るところを時期を分けてみた。そうすると巣が増えた。2年間行い、最大で十二・八倍に増えた。そのタイミングは刈ってから次の草の丈が1mくらいまで伸びる期間、だいたい50日から60日あけることでカヤネズミが巣をつくることがわかった。また特定の草を刈るとどうなるか試す実験もしてみた。クズだけを刈ってみたところ、巻きつかれていたオギやエノコログサが増えて、巣をつくってくれた。このよう

に一部の管理でも増えたように、カヤネズミは草地環境に敏感だ。この特徴から草地環境の環境省のモニタリングサイト1000の中で草地環境の指標種として指定された。草地は守っていないと維持されないことが理解頂けただろうか。関心をもっているかた、みなさんで草地を守るという意識をもっていただければと思う。

茅葺き文化講座

「茅場の再生と活用

— 森林塾青水の活動報告 —

清水英毅

私たちのフィールドは利根川の最上流にある群馬県みなかみ町にある。尾瀬も近く豪雪地帯。過疎と高齢化で限界集落

目前である。広義では藤原の集落全体だが、狭義のフィールドは21ヘクタールの元藤原という集落の入会山、茅場である。草原は200ヘクタールあったうちの20haが草原だったが、今では11ヘクタールとなった。9ヘクタールは森林化し、108ヘクタールは開発してスキー場とゴルフ場となった。今ではスキー場、ゴルフ場の開発と合わせて森林化が進み自然林となったところ、残りの21ヘクタールを我々がみなかみ町から借り、上ノ

原入会の森という名前にした。四季折々、4月になると雪解けになり、草原の真ん中にジュウロウタという利根川の源流の一滴が流れ始める。4月の第三週に野焼きをする。豪雪地帯の野焼きの特徴として、まわりに雪を置き防火帯とする。5月の連休になると山桜、ミズナラ、ブナが美しく、夏になると蝶々が舞い、秋になり霜がおりると茅刈りをする。刈った茅は5束をまとめて1ポッチにする。冬は一面雪景色。現代版の入会地を考える会というものを開催した。また我々は藤原区地域の特別区民になっている。合言葉は飲水思源、中国の古い教えで、水を飲めば源を思うべし、井戸を掘ってくれた人の恩を忘れてはならない、という思いで活動している。

当初は管理活動が中心だったが、最近では利用活動が中心になっている。草原の状態を調べ、地域の人に入会の歴史などをヒアリングした。野焼きをし、周囲に雪をおき、山のクチャゲをやる。地元のプロの業者をインストラクターとして招き指導してもらった。秋になると茅を刈り、結束する。刈った茅は地元の鎌倉時代から伝承された獅子舞で重要文化財になっている神社の茅葺きに使う。管理活動では浸入樹木を防いで除去したり、看板を設置したりしている。

「持ち込まない、持ち出さない、とっ

てよいのは写真だけ、残してよいのは足跡だけ」という入会の約束を作った。子供もよく来るので、教育旅行の受け入れも熱心にやっている。草原と関係ないが、集落にたくさんある古道を住民と共に再生してウッドパスとして使っている。最近では古民家の再生を計画中でトタンをかぶった茅葺き民家を借りることが決まった。そこを活動の拠点、並びに地域の活性化の拠点基地として使っていく予定。

実践講座コモンズ藤原を年間8回程行なっている。年間延べ約千人がこのフィールドへ訪れ、最低一泊二日している。我々が利用しているのは全て地元生まれ地元育ちの民宿やペンションで、地元にお金が落ちるようにしている。役場から

は土地を借りている。みなかみ役場が今年4月に、生物多様性地域戦略を推進するための手立てとして昆虫保護条例を制定し、そのうちの1つに我々のフィールドが指定された。

茅の利用としてまず、国の重要文化財、5棟の屋根替えを手伝った。地元の神社にも使った。次にブルーベリーのマルチ材に取り組んだ。八月にススキを青い状態で刈り、みなかみ町の第三セクター農村公社に届け、ブルーベリーのマルチ材になった。乾燥防止になると同時に雑草も生えず虫の侵入を防ぎやすくなる。また日本茅葺き文化協会から声がかかり、東日本大震災の被災地の仮設住宅の屋根の断熱材になった。ストローベ

ルハウスについても今後検討したい。かつて国土の15%を占めていた草原面積も今では1%。里山で失われたのは森林ではなく草原と湿地だ。そこに絶滅危惧種がたくさんいる。草原はすばらしい生態系サービス、自然の恵を我々に与えてくれる。CO2の吸収もアカマツよりススキのほうが高い。貨幣価値にするとどれくらい値打ちがあるか試算してみたところ、21ヘクタールの上ノ原入会の森は、年間五千万円になる。貨幣価値に計算することは私自身あまり意味はないと思うが、目安としてこういう試みをしてみた。また昆虫保護条例の対象になり、みなかみ町は工場誘致ができなくなつた。利根川の水源のわずか21ヘクタールだが、貴重な環境資源が未来永劫保全されていく。

森林塾青水としては、利根川流域で自然の恩恵をうけるみんなで支えようという流域コモンズを始めている。我々の会員は個人で80人、企業で20社。大震災後、暮らしの有り様、文明のあり方の見直し

が迫られている。地球がもっている環境容量の範囲内で、藤原なら藤原が、相倉なら相倉がもっている範囲内で暮らすことが、賢いこれからの文明の有り様ではないか。その見本となるものが我々のフィールドにあるのでアピールしていこう

と思うている。

茅葺き文化講座

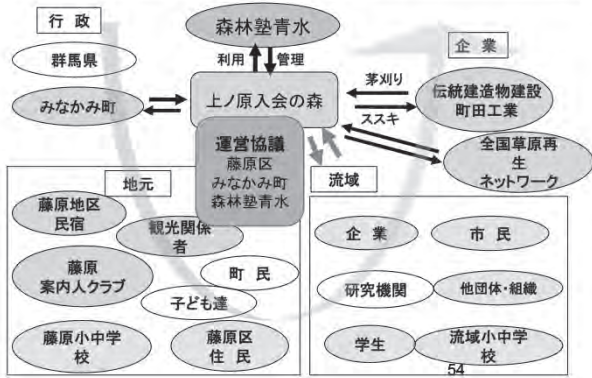
「五箇山の茅場の歴史」

浦辻一成

専門は、合掌造りの家屋史や土地制度で、茅場については派生的にわかってきた部分になる。五箇山地域には縄文時代あたりから人が住み始め、弥生時代頃農耕の生活が始まり、集落を形成して平坦な土地に耕作を始める。その耕作に付随して草嶺(ソウレ)と呼ばれる斜面の草地の部分畑にすることも始まる。江戸時代に茅場というものが成立する。茅場や集落の上の林も雪持林として集落を守るために必要な茅場と林も史跡の指定を受けた。この後、集落の部分が重要伝統的建造物群保存地区に指定され、世界遺産になった。山の奥にはかつて茅場であったが現在使っていない場所もある。現在も山の裏側に茅場があり、年間六千束くらい刈り取れるといわれている。

帳面を元に調べており、これは文政10年相倉村基盤割歩帳というもの。基盤割とは、加賀藩政下で行われた土地の割換制度で田地割りとも言う。20年ごとに各百姓の土地の利用権を白紙に戻して、くじ引きで新たな用地を定める。これが基盤割りである。簡単に説明すると、五千円のお寿司を買ったとして、Aさんが

流域コモンズへ



▲「流域コモンズ」の概念図

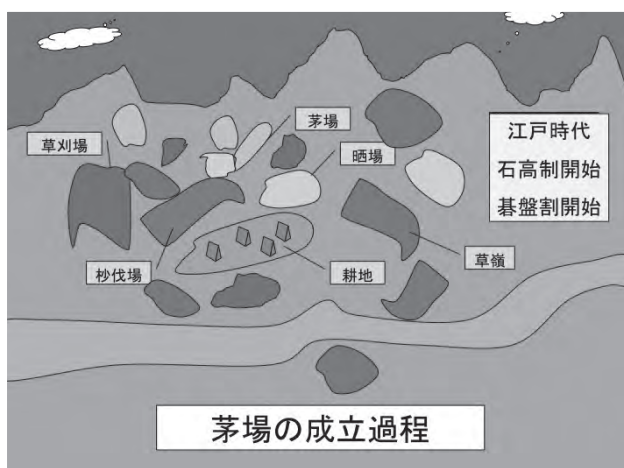


▲清水 英毅 氏



▲浦辻 一成 氏

三千円出してBさんが二千円出した。全部で64巻あってAさんが38巻で、Bさんが26巻わけると、数の上では三千円と二千円に対してびったりわけられる。巻き寿司といなり寿司をBさんに26巻わけるといつて分けてBさんが受け取ってくれるなら、喜んでお寿司を買うわけだが、お寿司は各5種類ずつあるので、Aさんは3巻ずつ、Bさんは2巻ずつというのが公平な割り方というもの。集落の土地もまさに寿司桶のようなものであり、宅地や稲田のように重要な場所もあれば、一方で茅場のように融通の効くものもある。それを集落内で同じ配分で分割しようというものが基盤割の基本的な考えだ。一つの集落の中で屋敷地はこれだけ、桑原はこれだけ、林はこれだけ、ということがわかったとすると、公平に分配しなければならぬ。ここで百姓の持ち高というものが出てくる。株券のようなもので権利である。10石持っている人と5石持っている人とは貰える面積は倍違う。基盤割では林と桑原も同じ割



▲「茅場の成立過程」の概略図

合になるわけである。
基盤割歩帳から、吉右衛門の上納は〇、八三石で百八把分の茅場を取得できたことがわかる。相倉では文政10年に七千五百把の茅がとれたと計算上できる。それを現在の数値と比べてみると、平成22年に六千束作られ、茅葺きの家屋が20棟程ある。六千束は相倉全体を考慮すると不足している。文政10年も30軒で七千五百束と不足しているのではないかと推測できる。だが実際茅は足りていた。なぜ足りていたか、その可能性としては茅が長持ちしていたので、年間に生産する茅が少なくて済んだ。現在は15年おきに葺きかえていたが、昭和30年代頃は20年〜30年ぐらいいもったと言われている。

茅が長持ちすることで、茅を葺き替える期間が長かった。さらに茅屋根の厚さが薄かったのではないかと考えられる。

吉右衛門の住宅は住宅面積29歩で屋根の面積は58歩。つまり百九十一平方メートルになる。この辺りでは一平方メートルに二十二束の茅をいれるので、現在であれば全体で四千二百一十一束使う。その他に棟茅や差し茅とかもあるのでさらに必要になる。吉右衛門の茅場は1年間に百八束しかとれなかった。ではどの様に四千二百束を準備したかというと、葺き替えない時は貸し付けて必要な時に返してもらおう、あるいは借りるという方法でやってきたと予想される。吉右衛門の茅屋根は30年もつとし、三千二十四束が必要になる。文政10年頃は75センチメートルの厚みで葺いていたと計算上成り立つ。もう1つ考えられるのは家が小さかった事だ。住宅の規模の測り方で九尺竿で二間とするものがある。寸法をわかりやすく比較すると、九尺竿で二間とは2.7メートルだが、二間竿では2間を測ると3.6メートルである。長さで言うと3/4、面積で言うと9/16の差が生じる。この事に注意して解析したところ幕末期の住宅は小さかったことがわかる。茅の厚みが薄いという事と家が小さいという事は密接な関係がある。

嶋村（現、平地域大島地区）の文政4

年の基盤割帳簿の中で茅場の分配をした帳面がある。これを見ると、一番がトクエモン、二番がチュウベエとキエモンが一緒にくじ引きでもらった。三番がキチベエとヘイクロウが一緒にとっている。三箇所20束、20束、15束と合わせて55束となる。普通は土地の分配をする際に面積を基準にするが、茅場に関しては取れ高を基準にして分配した。嶋村地区の茅場をマッピングしてみると山の一番遠いところに茅場が作られてきた。これは山からもつてくるもの、桑、楮、草、茅の中で、一番茅が軽かったためである。他の重いものは近いうちから採集し、軽い茅は遠くから運ぶようにしたことが推測される。利賀村の基盤割資料によると、茅場を今までは異なり面積で分配している。ソウレビキ28%、クジゾウレ42%、ソウレは自分で決めた場所、クジゾウレはくじ引きによって決めた場所、合計70%がソウレとなる。残り15%が茅場、15%が草刈場となっている。このような資料は文政末にしかない。それは人工的に栽培していた茅場ではなく、自然に茅が群生していた茅原で採集が足りていたためだ。その後土地の割り変え資料に載るようになる。ただし、この後茅場として掲載されない場合もあり、これは草刈場やソウレなどに含まれていると考えられる。

茅葺き文化講座

茅葺き職人談義

11月20日 菅沼集落

五箇山で森林組合の若手を指導しながら、40年以上茅葺きに携わってこられた小林亀清氏と、白川郷かや屋根技術舎代表の和田茂氏を講師に向かえ職人談義を開催しました。聞き手は美山町の茅葺き職人で、当会理事の西尾晴夫氏です。

■五箇山の屋根の葺き方、材料について

小林 相倉地区では10月20日頃から茅刈りが始まる。茅場は斜面なので、刈ったら葉っぱの方を下にして乾燥させる。良く晴れた日に刈り取り、2、3日乾燥させた後で束ね、トラックで運ぶ。カリヤスの葉が少し黄色くなると刈り時。

茅葺き文化講座 2

日時 平成 23 年 11 月 20 日 (土)

場所 富山県五箇山 菅沼集落「与八」

参加者 50 名

(開催プログラム)

司会 上野弥智代 (日本茅葺き文化協会理事)

■あいさつ

代表理事 安藤邦廣 (筑波大学教授)

越中五箇山菅沼合掌造り保存顕彰会長 中島慎一

■茅葺き職人談義

聞き手 西尾晴夫氏 (屋根晴代表)

語り手 小林亀清氏

(富山県「森の名手・名人」茅葺き職人認定者)

和田茂氏 (白川郷かや屋根技術舎代表)

■交流会



▲左から、小林亀清氏、安藤邦廣、和田茂氏

マンサクという木を練る。練るというのはぐるぐる捻って叩いて柔らかくした状態で「ネソ」と言い、合掌の小屋組みの部分の固定に使う。縦の部分をクギサオと言い、白川郷ではクダリと言うそうだ。屋根葺きはその地方で異なる。合掌の小屋組みでは昔、蚕を棚飼いしていた。クギザオの上に下地を敷いて茅を葺く。蚕の世話をする際、ロウソク、ガス灯等の明かりが屋根裏に燃え移らないように下地を敷いた。破風尻を作ってから破風を作る。白川郷では破風をカタギリと呼ぶそう。屋根の厚さは破風で決まる。丸く作って5回くらい縛る。アサギは軒の一番下、オジリに取り付ける。アサギは麻の一種で今は富山県では生産できないので、栃木から取り寄せている。丈夫で腐らずに何十年でも使え、仕上がりも綺麗。マンサクの木を練るとネソだが、茅をとめるために使った場合はヌイボクと

言う。ここを平たく葺いた場合は、年月が経つと溝ができる。溝ができないように破風の部分を少し引き起こして茅を挟む。この作業は熟練した技術を必要とする。屋根につけていく丸太の足場をカイドウザオといい、ここを歩いて縫い、また上がつて縫い…下から順番に縫う。ミズハリは栗の木で丈夫なため雨風に晒されても20年程もつ。茅を横にならべ、これを三回くらい並べる。まず右側、次は左側に置き、ノノセで押さえる。会場 防火について工夫は？

小林 とにかく火の用心。防火装置もあり、年に2回くらい一斉放水している。各戸四方に放水銃が設置されている。会場 これまでに放水銃を使った事は？

中島 まだない。世界遺産に指定されてから放水銃などの設備が整った。明治24年に大火があったと記録されている。会場 葺き替えにかかる時間は？

小林 昔の結い制度の時は一日で葺くこともあったが、通常は片屋根を分割して部分的に葺く。茅も職人も不足しているので、自分の茅の持ち前、葺ける量、葺けるペースで調整する。例えば片面6分割であつたら全面葺くのに12年かかる。結い制度とは無償の労働交換で、手伝わしてもらったらずお返しをする。それで成り立っていたが、トタン葺き等が増え、結い制度も昭和34、35年頃から徐々に無

くなった。その後は茅や労働力が不足した時は森林組合から助っ人が出ている。会場 50坪程の建物で茅はどれ程必要？

小林 屋根面積一坪に70〜80束程必要。

■白川郷の葺き方、材料について

和田 白川と五箇山の違いは葺き替え方で、白川だと大きく区切ることはあるが、部分的にやることはあまりない。また筋交いを白川では大羽交いと言い、下から上まで全部繋がっている。途中に合掌と合掌に小羽交いを入れる。白川では横をヤナカ、縦をクダリと言う。ネソを使い合掌を結束し、ヨシズをかける。妻の部分をカタギリと言い、白川では拳くらいの隙間のカタギリザオというところに、ヌイボクを尖らせて挿して縫っている。ネソも向きを互い違いにさせて強度を増している。雪国の特徴でネソは曲がったものでないと練りにくく、結束させた時も納まりが悪い。軒先は上から縄で結束して、クサリゲタと言い合掌のコマジリを押さえるもの。五箇山との違いはカタの方が先がまっすぐ出る。

会場 カケヤで結び目を叩いているか？

和田 はい、縄を叩いている。ヌイボクのところを叩くと切れてしまうので叩かない。5分縄を使っている。

西尾 白川も昔はカリヤスだったのか？

和田 主にカリヤスだった。今は足りないためススキを使っている。昔は自分の

家を葺くのに3、4年と茅をためた。また結いもあり茅の貸借をし葺きあげていた。茅場は個人で持っていた。

小林 元々集落の中で役割分担があった。破風を作る職人や古屋根と新しい屋根を葺き合わせる職人、真ん中は簡単なので若者がやる。成長すると破風をやる機会をもらえる。

会場 通常は何月に葺くのか？
和田 雪の無い4月頃や秋。夏もやる。茅葺きの厚みは60センチ程で、両方葺き替えた後、上に棟をのせる。

西尾 若手職人についてはどうか。
和田 白川は20代が2人、30代が1人と地元のベテランで定年した職人が5人、合計8人体制で、大体が地元の人。

小林 この辺は五箇山と造りが違う。
和田 最近は棟のあとにトタンをひくが、昔は全部取り畑に持っていき新しいのをのせた。それをフネツツミと言い、白川では棟だけは毎年葺いていた。雪で押されて緩み、飛ばされやすいこともあり、毎年春先に全部とり、押さえ直している。

小林 五箇山の場合は西部森林組合が担っている。今は山の整備はほとんどなく茅葺きを主にやっている。職人は若い人が22人位で平均年齢40歳位。県外から就職して中にはこちらで結婚された方もいる。そういう縁結びは嬉しい。

■師弟関係や技術の伝承について
西尾 茅葺きの中でも合掌は特殊な例で、僕は親方と弟子という制度がある

■世界遺産登録後の変化について
小林 昭和45年に国の史跡指定をうけた。五箇山の人達も瓦屋根にするのを辛抱し、それが世界遺産に繋がった。南砺市になり、観光客は世界遺産を目当てに訪れる。昔の姿を大切にし俗化しないよう努めていきたい。屋根を含む生活や仕組みも世界遺産なので、守っていきたい。

和田 集落、田畑や山、人の内面“結い”の精神全てが世界遺産だと思っている。人の内面をもっと評価してもらいたい。

西尾 白川郷の葺き替えは今も結いでやっているのか。

和田 結いは年に1回程。その家族だけでなく親類など総出で、茅の準備や人手のお願い等2年程前から準備する。

西尾 集落の中でどういう順番で葺き替えるのか。また白川と五箇山の違いは？
和田 結いの場合女性含め二百〜三百人。屋根の大きさにもよるが、最低それくらいは必要。

小林 五箇山は分割して葺くので、茅の量や職人の人数を考慮する。葺き替えの周期や時間配分などを逆算する。

■3人の職人が師匠や地域で学んだ事とは違い、親方となり工夫した点、自分の考え方でやっている事について
小林 少しでも長持ちするように丈夫な茅を下に使い、茅を選ぶ様になった。茅をとめる位置やとめ方も工夫している。

和田 やりかた自体は変えるつもりはないが、1年でも2年でも長持ちする葺き方を勉強中。一軒一軒屋根が違うのでそれらを考慮しつつ葺く。若手にも難しいところに取り組んでもらっている。

小林 森林組合の若い人達は最初は縄の結び方も分からない方もいるが、少しでも上手くなったら誉めるようにしている。叱る事も大切だが誉める事も大切。また真剣にやるように言っている。そうすると仕事が出来てくれる。

西尾 私は見習いに入ったのが20年前。その頃は茅葺き職人の20代は全国でも3人しかいなかった。僕の親方も小林

さん世代。全国的に和田さんくらいの年代の方が本場に少ない。昭和40年代に経済が良くなり、若い職人は皆転職した。僕が20代の時に美山町で5年間親方につき修行し、全国武者修行にでた。様々な技術を見て回りいいところ取りをした。だが美しさや我々の内面、スピリット、は変えていけない部分であり私が一番伝えたい部分でもある。私は親方から誉められたことは一度もない。世間はそう簡単に誉めちゃくれない。今もやれるのは誉められなくて当たり前という教育を受けてよかったとも思う。今は「どないして最後おさめるんや」と親方から質問される程変えている。茅勾配を昔はぎりぎり真横に並べ、屋根の目をこます、美しい屋根にすると習ったが、今は囲炉裏がなく中から乾かせないので、若干茅を立てて水切りがよくなるよう葺いている。

■話は尽きず、交流会でも情報交換が盛んに行なわれた。

▲熱心な意見交換が続いた



▲模型や写真を見ながら行なわれた



▲熱心な意見交換が続いた

第3回茅葺きフォーラム 平成 24 年 6 月 9 日（土）～ 10 日（日） 福島県天栄村大会開催！

「森の資源が循環する地域づくりー茅葺きによる福島復興の取り組み」

平成 23 年 3 月 11 日発生の東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の爆発事故に伴う放射性物質拡散による放射能汚染とその風評被害は、国内外に大きな影響が及んでいます。このような中、日本の茅葺きを愛する仲間が被災地のひとつである福島県天栄村に集い、茅葺き文化をとおしてできる震災復興への取り組みとその可能性について考えます。天栄村は、日本有数の茅葺きの温泉宿の湯本地区の保存と再生に取り組み、また地域エネルギーの利用においても先進的な地域です。そこから世界に、未来に茅葺き文化を伝えるためのフォーラムを開催します。これを通じて、森の資源が循環する地域づくりについて考えるものです。みなさまご参加をお待ちしております。

■主催 福島県天栄・茅葺きフォーラム実行委員会 ■共催 天栄村 天栄村教育委員会 天栄村観光協会 一般社団法人日本茅葺き文化協会 ふくしまけん街道交流会

日時 平成 24 年 6 月 9 日（土）～ 6 月 10 日（日）

会場 ○フォーラム：天栄村羽鳥湖高原交流促進センター
（福島県岩瀬郡天栄村大字田良尾字芝草 1-3857）

○情報交換会：岩瀬湯本温泉・満願寺境内

○宿泊： 岩瀬湯本温泉ほか

問い合わせ、申し込み 一般社団法人日本茅葺き文化協会 事務局

〒 300-4231 茨城県つくば市北条 184 Tel/Fax 029-867-5829

E-mail info@kayabun.or.jp

【6/9.土】

10 時 開場、受付開始

11 時～ 11 時 45 分 日本茅葺き文化協会総会

昼食 道の駅「羽鳥湖高原」

13 時 茅葺きフォーラム開会

13 時 15 分～ 14 時 45 分

第 1 セッション「茅葺きによる福島復興の取り組み」

コーディネータ：米山淳一（日本茅葺き文化協会理事）

「茅葺き屋根と歴史街道」 ふくしまけん街道交流会

「茅葺き屋根古民家再生による震災復興 開催地天栄村の取り組み報告」

はりゅうウッドスタジオ

「茅を断熱材として利用した仮設住宅」

金親丈史（会津 IORI 倶楽部）・長田友和（富士勇和産業）

14 時 45 分～ 15 時 15 分 ティータイム 情報交換

15 時 15 分～ 17 時

第 2 セッション「森の資源が循環する地域づくり」

コーディネータ：上野美帆（日本茅葺き文化協会理事）

「地域エネルギーによる地域再生 天栄村湯本 EIMY の取り組み」

新妻弘明（東北大学名誉教授）

「茶堂の心と生きものに優しい低炭素なまちづくり」

大崎光雄（高知県梼原町）

「持続的な茅の利用と炭素の吸収ー土壌への炭素蓄積」

当真要（愛媛大学農学部）

18 時～ 20 時 情報交換会

【6/10.日】

9 時～ 16 時 見学会 会津の茅葺き民家集落と歴史街道

（岩瀬湯本～下郷町大内宿～南会津町水引集落～前沢集落）

金沢湯涌江戸村

「旧園田家移築修復工事現場見学会」

日時 平成 24 年 4 月 7 日（土）

午後 1 時 30 分～午後 4 時（終了予定）

場所 金沢湯涌江戸村（金沢市湯涌荒屋町 35-1）

内容

- ・丹後村おこし開発チーム所属学生によるプレゼンテーション
- ・笹葺き作業現場の見学（職人による解説）
- ・笹葺き体験（縄結び、差し笹づくり等）
- ・茅葺き職人との懇談会

定員 30 名（定員になり次第終了）

申込方法 電話受付 金沢湯涌江戸村 076-235-1267

*移築修理工事の現場見学会は 5 月中旬にも開催予定。

*旧園田家は、江戸時代中期に金沢市二俣町に建てられた紙漉農家で、重要有形民俗文化財に指定されています。

*丹後村おこし開発チームは、立命館大学経営学部の学生による団体です。京都府宮津市の上世屋地区を拠点に、地域の活性化を目指した活動をしており、笹葺き民家の再生や活用などのプロジェクトを行なっています。

茅ふきたより 第 5・6 号合併号

2012 年 3 月 30 日発行（非売品）

発行：一般社団法人日本茅葺き文化協会

編集：茅ふきたより編集委員会

一般社団法人日本茅葺き文化協会

〒 300-4231 茨城県つくば市北条 184

TEL/FAX 029・867・5829

E-mail info@kayabun.or.jp

URL http://www.kayabun.or.jp

◎みなさんの情報をお寄せ下さい！茅葺きについてさまざまな情報とご意見・ご要望をお待ちしております。茅刈り、葺き替え情報大歓迎。事務局宛までお寄せ下さい。

（編集後記）
「来年は福島で会いましょう！」と
いつて列れた去年の鹿児島知覧大会。
早かったような、長かったような 1 年
が過ぎました。まもなく福島県天栄村
大会です。皆さんにお会いできるのを、
指折り楽しみにしています！（弥）